

人間観の歴史と「関係力」

島岡 光一

はじめに

ここ数日(2003年7月20日現在)、ぼくの経済学の基礎概念である「関係力」(本当は「関係諸力」とすべきだろうが日本語では複数を省略する)について、話をする機会が頻繁にあった。

中国人の友人によると「関係力」というと、中国のいわゆる「関係主義」を連想して、縁故を利用してうまく世渡りをする能力のように受け止められるそうである。もちろん「関係力」は—それも含むが—縁故力ではない。英語に直すとどのような言葉が適当か定訳をまだ、もっていない。relative powersなのかなあ?もしそうだとしたら、ここでもrelativeとは縁故をも意味してしまう。

また、最近出た「図書新聞」(7月19日号)におけるぼくの本へのレビューは、なるほど経済学と教育学と結ぶ「回路」形成への「苦闘」についてすどく指摘しているし、「回路」という言葉遣いがぼくにはなかったので教えられたが、「関係諸力」概念についてはほとんど触れていない。

よくぼくの編著書を読みこんだ学生も、「関係力」という言葉の意味が詳しく定義されていないと批判していた。もっとも詳細に定義されない方が、あれこれ自分の経験に引きつけられて、汎用性のある興味深い概念だという意味のことをつけ加えてくれたが。

そこで、この「関係(諸)力」(たんに関係力とする)概念がどのようにして、ぼくの中に形成されたかを書いてみたいと思う。もちろん関係力を一義的に硬直的な定義をするつもりはない。しかし、ぼくの狭く浅い知見からとつぜん思いついたものではないことをお断りしたいだけである。

アリストテレスの「人間は社会的動物である」



話は2300年も以前に遡る。古代ギリシャの大哲学者であるアリストテレス(前384

—前322年)は、その講義録である『ニコマス倫理学』において、“人間は善を目指す。善は幸福である。幸福は自足である。自足的とは孤立的という意味ではなくて、人間**関係**から得られる。人間は本性的に「**社会的**(ポリーチコン πολιτικον)存在である」から親、子、妻、友人との**関係**を含めての自足でなければならない”とのべている。ギリシャ語の「ポリーチコン」という言葉が悩ましい。ポリスとは古代ギリシャの都市国家のことであるから、「国家的」と訳すこともできる。事実『政治学』において、アリストテレスは、「人間は国家的(ポリス的)動物である」とのべている。アリストテレスによれば、“人間は自然によって村を形成し、「自足」の要件を満たすのは終局の共同体の「国家(ポリス)」である。だから自然必然に「人間はポリス的動物」なのである”とのべ、同じ集団生活をするミツバチとちがうのは、この「ポリス的動物」であるかないかの違いである。ところで、これとどのように関連するかよく分らないのだが、“人間は、他の動物と異なって、「ロゴス(理性、言葉)」をもっていて、快樂や苦しみを音声で伝えるだけでなく、それによって有利・不利、正邪、善悪を(他者と)共有することができる”。このように、人間は、社会的な自足への欲求をもつと同時に、本来「ロゴス」をもっていて、正邪、善悪を他者と共有する終局的共同体としての国家を形成する。その意味で人間は「ポリーチコン存在」なのである。もちろんアリストテレスには奴隷など念頭にもなく、もっぱら自由市民だけが対象だから、人間=市民=ポリスマンバー=社会人である。ここから、アリストテレスは後に「人間は**社会的動物**である」と論じた元祖とされるに至った。

オウエンの「人間は環境の産物である」



時代は遙かに下って—中世西欧や東洋のことにはぼくは無知だから—、イギリスに、ロバート・オウエン(1771—1858年)という社会主義者がいた。周知のようにオウエンは、1799年頃からイギリスのニュー・ラナークで、自ら大きな紡績工場を買収し、自分の工場働く労働者を、当時の労働条件からすれば格段に緩やかな労働条件で働かせ、生産性を上げて経営者としても成功者であった。彼は、労働者やその子女への教育に熱心で、かれ独自の「人間性格形成理論」にもとづく、「人間形成学院」や「幼児学校」を設立したり、後に「ハーモニー村」という共産主義的地域形成に尽力した。彼の有名な教育理念の一つとして「**人間は環境の産物である**」がある。ここでいう「環境」とは自然も含む社会である。

人間の性格は環境によって形成されるものであるから、その責任はその個人に帰せられるものではない。良好な環境によって良好な性格が形成されるのであるから、この良好な環境こそ社会主義社会に他ならない。この考え方は明らかに唯物論であって、当時、キリスト教の教義と対立し、オウエン主義者とキリスト教徒との激しい論争がイギリス各地で展開された。

しかしながら、オウエン主義者の人間の唯物論的規定は、「必然性の哲学」として体系化され、人間は環境の従属変数に過ぎないかのような議論とキリスト教の人間は神の子に過ぎないという奇妙な類似性の間で行なわれた論争なので、当時から不毛な論争と言われることがあった。

オウエンの人間観である「人間は環境の産物である」は機械がちょうどモノを作るように環境によって人間が作られたという機械論的な唯物論であったし、そこに産業革命期の発想が色濃く陰を落としており、マルクスにも大きな影響を与えた。しかし、さすがにマルクスは「必然性の哲学」に示される単純な環境決定論には陥らなかった。

マルクスの「人間の本質は社会諸関係の総体である」



カール・マルクス（1818—1883年）が若い頃、活躍していたドイツ人でルードヴィヒ・フォイエルバッハ（1773—1833年）という哲学者がいた。彼はヘーゲル学徒でありながら、ヘーゲルの観念性を批判して、唯物論唱えた。若いマルクス（26歳）はフォイエルバッハを唯物論と自称しながらも「愛の宗教」（ばくも「関係力」というところの「愛の宗教」そのものと言われることがある）に陥っているとして、「フォイエルバッハに関する11のテーゼ」の第6「人間の本質は一個の個人に内在するいかなる抽象物でもなく、その現実性においてはそれは社会諸関係の総体である」とのべて、人間を関係論的現実性の中に置こうとした。

よく見てみるとこの文章は、じつは人間性にかんしてはなにも言っていないのだ。「社会

諸関係の総体^{アンサンブル}」と言っても「社会諸関係」が説明されなければ人間の本质はブランク（空文）なのだ。にも関わらず、この文章はばかに有名になった。多くの研究者（今時若きマルクスを読もうというのはマニアックな研究者しかいない）が、その空文にながしか新しい息吹を感じた。だからこそ、有名になったのだ。ぼくは、このマルクスのテーゼこそ、遠くアリストテレスから繫留を引く関係論的人間観の嚆矢^{こうし}というべきものだと思う。ヒトは、生物学的に実体論的に記述できるけど、人間の本质は社会諸関係の総体である、とマルクスは非実体論的に喝破した。

ところで言葉遊びのようなことをいうが、第1に、関係とは内部要素の相互運動である。第2に、関係は関係と関係せずにはいられない。第3に、その裏だが、関係は関係以外とは関係しない。第4に、関係は本来的に閉じた系である。閉じた系とは、自己の内部の構成要素以外に関係を持たない系のことである。第5に、関係論的人間は閉じた系（アイデンティティをもつ存在）なのである。第6に、関係が関係と関係をもつということは関係が絶えず変化するということでもある。第7に、閉じた系としての人間性は関係の絶えざる自己組織の渦中に置かれている。

この閉じた系としての人間性を、当時のマルクスはヘーゲルの影響を受けて「類的存在」という言葉で呼んだ。このマルクスの関係論的視点は、実は『資本論』（第1巻第1版は1867年）にも貫かれるのであって、たとえば「資本というものは、実体論的モノではなくて、姿を変えつつ運動するなにものかなのであって、一つの過程であり、一つの関係によってのみモノが資本となるのである」とのべる。また「黒人は奴隷ではないが、ある「関係」におかれたときに奴隷となるように、機械はそれ自体資本ではないが、ある「関係」におかれたときに資本となる」とのべている。マルクスはこの関係論を堅持しながら、他方では唯モノ論に陥ることもある。貨幣などをややもすると金として実体論的に展開する。その点を廣松渉などというレトリックが先走りする学者が一面化してマルクスの「物象化」論を疎外論の到達した終局的な境地として高く評価してしまった。この点を我が旧友岩淵慶一は、30年ほど前に、執拗な批判を繰り返していた。たしかに疎外論を関係論的に解さないで「物象化」論的に解してしまっただけでは、救いようがない。マルクスは「テーゼ」の最後の第11テーゼにおいて「哲学者たちは世界をさまざまに解釈したに過ぎない。大切なことは、しかし、それを変えることである」とのべていることもあまりにも有名だが、関係論的に閉じた系としての人間ならば、関係を変えることができるわけだ。また変えないではいられない。

エンゲルスの史的唯物論の「生産諸力」は「関係諸力」とすべきだった



ぼくは、近著の『野麦峠に立つ経済学』（春風社）において、マルクスを批判したのは、マルクスの関係論は所詮二項対立の関係論でしかなかったという点にあった。マルクスのもっていた科学的武器は古典科学の中の機械論的運動理論でしかなかった（言い換えるとかれは熱力学的知識に乏しかった）。時代の制約下で、やむを得ないとはいえ、万物の現実運動は、二項対立ではなくて、多対多関係において見るべきだった。それと共に、現時点でマルクス批判につけ加えたいのは、人間の本質を「社会諸関係の総体」としたのならば、人間の現実的な力を「関係諸力」とすべきであったという点がそれである。マルクス＝エンゲルスは、産業革命のイデオログ（思想的正当化論者）であったイギリス政治経済学（スミス、リカード、マルサス、J.S.ミルなど）を学習する中で、人間の基本的な「力」を「生産諸力」とし、人間関係を「生産諸関係」に還元してしまったのだった。マルクス＝エンゲルスも、産業革命熱に浮かされた唯モノ論者である資本家（および賃労働者）のためのイギリス政治経済学の罠にはまってしまったわけである。マルクス＝エンゲルスが『ドイツ・イデオロギー』や『共産党宣言』の中で定式化した「史的唯物論」（この言葉はF・エンゲルスが考案したものだと思う）なるものは、そうやって生れてきた産業革命の落とし子であった。

現代を「情報革命の時代」と呼ぶ人が多い。その含意にぼくは異論がない。その現代において、機械ではなくて、また二項対立ではなくて、多対多関係の多重的ネットワークとそのループ社会へと急速に展開している。その意味で、新「新世界」が見え始めている時代である。このときに、もし人間の本質を「社会諸関係の総体」であるというマルクスの規定を正しく受け止めるなら、人間の本質の「力」は、「関係力」でなくてはならない。それは関係論的に閉じた系における「関係力」でなければならない。かくいうぼくも「情報革命の時代」の落とし子であるという規定を甘んじて受ける。

しかし、さらにぼくは話を進める。「関係力」は関係する能力であって、プラスのベクトルをもつ創出力のみではなくて、マイナスのベクトルをもつ引き込み力も意味する。ここが「生産諸力」概念の一方向性と根本的に異なる点なのである。つまり個々人のアイデンティティの確立の上に立つ相互依存の運動体を推し進め、引き込む能力でなければならない。ア

マルティア・センのケーパビリティのアプローチも、関係創出力の面のみに焦点を当てているのでなお一面的である。

ぼくの「関係力」概念を、マルクス批判の上にのみ成り立つのではなくて、マルクスが産業革命熱に冒されて脇道にそれてしまった方向性を、正道にもどすという意味では、マルクスを継承しているともいえるわけである。

センのケーパビリティがいくつかの数値的指標化を試みられているように、「関係力」を客観的に記述する数値指標がまったくないわけではない。マルクスも「生産（諸）力」をあまねく詳細に数値的指標化していたわけでもないように、その数値指標は社会と時代によって絶えず書き換えられなければならない。その意味で一義的に定式化することは危険でさえある。しかし、今、当面「関係力」を記述する数値指標を必要としていることもまた事実である。その作業は、旧来の伝統的な根基層の人々の絡まり合いの再評価と共に、グローバルに展開するネットワークとアソシエーションの諸形態とメディアの新評価を必要とする。ただ、われわれに20世紀が遺してくれた政治形態としては民主主義と倫理観としては自由が、あらたな「関係力」理論構築の前提であり、目標でもある。

おわりに

アリストテレスをはじめとして、オウエン、マルクス＝エンゲルスにおける人間観を見るにつけて、これらを閉鎖系としての関係的關係論の根底に、人間の「関係力」を置いてみるのが極めて重要であることにあらためて気づく。「関係」は腹の足しにならない、飢えたときには食料があればよく、関係は要らない？ぼくはそうではないと思う。飢えたときにこそ食料の前に「関係力」が最重要能力として意識されるだろうと思う。この命題が実証されていない現在では、ぼくの「直感」としておこう。